

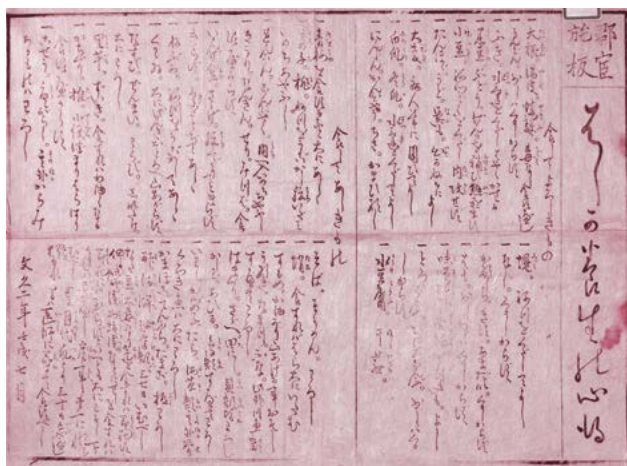
幕末のはしか禍を生きる

文久2年(1862)8月、上伊勢畑村(上伊勢畑)の百姓又次郎(36歳)の妻もと(30歳)は、はしかを患い、若くして亡くなりました。娘のはつ(14歳)とさき(9歳)、そして4月に生まれたばかりの善吉を残して一。又次郎は、シングルファーザーとして3人の子供たちを育てることになったのです(「御用留」、上伊勢畑区有文書)。

はしかは麻疹とも呼ばれるウィルス性の感染症です。感染すると39℃以上の高熱や発疹の症状があらわれ、肺炎や中耳炎を併発することもあります。現在は1歳時と小学校入学前に2度ワクチンを接種して大半の感染を防ぐことができていますが、江戸時代には「疱瘡は見目定め、麻疹は命定め」とも言われた危険な病気でした。

文久2年の夏、全国ではしかが大流行しました。さらに、ひと月後にはコレラも並行して流行したことで被害が拡大しました。とりわけ江戸の被害は甚大で、3ヶ月の間に約2万人が亡くなったとも言われています(『藤岡屋日記』)。また、感染予防や回復に良いとされた薬・食品の価格が暴騰したり、神に頼んで災難を逃れようとした人びとが町中にあふれたりして、江戸は「麻疹騒動」と呼ばれる混乱状態に陥ってしまいました。

はしかとコレラの波は、水戸藩領にも押し寄せました。水戸馬口旁町(水戸市末広町)の油問屋小泉茂兵衛は、水戸城下の死者数を500人余りと見積もっています(「年中日記覚」、小泉家文書)。江戸と同じように物価が高騰し、神輿をかついだ群衆が騒ぎ立てながら市中を練り歩きました。一方、常陸大宮市域では、主に那珂川流域の村々で感染が拡大したようです。小泉は、長倉



▲郡官施板 はしか養生の心得 (小野瀬家文書)



添田 仁氏
近世史部会部会長
茨城大学
人文社会科学部准教授

村(長倉)の惨状について「此節はしか尚亦コロリ盛二五日之間に三十人之亡命有之、おそろ敷事」と記しています。村人の5%にあたる30人の命が、わずか5日間で失われたことになります。また、対岸の上伊勢畑村でも2ヶ月で8人が死亡しました。この年の上伊勢畑村は渇水による不作も重なり、「複合災害」の様相を呈していたことがうかがえます。

水戸藩の対策は、予防策が中心でした。市内の各所に、藩が配布したパンフレット「郡官施板はしか養生の心得」が残されています。これは、はしか予防に良い食品や生活習慣を示したもので、村役人が複写し、旅人にまで配られました。このほか、徳川斉昭の正室吉子(貞芳院)が、領民一人一人に予防薬を一粒ずつ配ったことも知られています。

さて、シングルファーザーとなった又次郎の運命や如何に一。乳飲み子だった善吉の育児は、となり村の飯野村(茂木町飯野)が月1分1朱の「養育金」で引き受けてくれました。さらに、上伊勢畑村の村人たちが、子供たちの「養育」に必要な御救金の下付を藩に願い出てくれています。感染症で被災した家族に寄り添い、救いの手を差し伸べ、生きる支えになっていたのは、身近な地域社会だったと言えるのではないのでしょうか。

幕末のはしか禍について詳しく知りたい方は、『常陸大宮市史研究』4号所載の拙稿「水戸藩の流行り病一文久2年(1862)の麻疹とコレラを中心に一」をご参照ください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)